

でも長男夫婦、孫夫婦それに曾孫の四世代同居で和氣霽々の幸せな毎日を過ごしております。

中支での戦争悲劇

福井県 内田新一

百万人に 百万人の 母あれど

吾が母に 勝る母はなし

という歌がありますが、私にとりましては特に我が母は、誰の母にも負けない立派な母だと信じております。

私が十三歳の時に、父は四十一歳の若さで死亡しました。以来母は十三歳の私を頭に姉二人、弟一人と四人の子供を一生懸命働いて育ててくれました。私達四人にとりましては、何物にも換え難い大切な立派な母でした。

私は大正十三（一九二四）年三月三十日、現在の福井県鯖江市住吉町三丁目一三―二七号で生を享け、鯖江市惜陰尋常高等小学校を卒業し、昭和十三（一九三八）年四月より鎌田印刷所に勤務致しました。昭和十六年十二月八日、真珠湾攻撃に

より大東亜戦争が勃発し、世界情勢は緊迫し、日本国内の情勢も一変しました。連日連戦連勝でしたが、日が経つにつれ南方各地で連合軍に敗北し、壮年も青年も少年も軍隊に召されるといふ状況になりました。

私も昭和十六年八月二十日から、舞鶴海軍工廠に徴用工として造兵部の火工工場に勤務することになりました。仕事は、大砲に詰め込む火薬等を取り扱う仕事で、それは毎日忙しい仕事でした。この仕事も御国のために大切な仕事だと心に決めて、先輩の皆様と共にがんばりました。私も妹も働くことよって母の苦勞に、少しはお役に立つようになりました。

昭和十九年に入って、戦局はいよいよ厳しくなり、三月早々学徒動員が実施され、また大学生の皆さんが軍隊に入隊されるようになりました。七月七日、サイパン島が玉砕し、七月十八日、東條内閣が総辞職する事態になり、国内も緊張の度合いが厳しくなってきました。

私は昭和十九年四月、徴兵検査を受け第一乙種合格となりました。第一乙種は甲種合格者と同じように遅かれ早かれ軍隊に召集されることになることに決めておりましたので、悔いはありませんでした。徴兵検査を待ち切れずに、年若い少年達が志願して兵隊になる時代ですから、徴兵検査が済みますと入隊するのが待ち遠しい気持ちでした。ただ気になりましたのは、長男である働き手の私が入隊したら母が困るであろうと言うことでした。当時の社会情勢は、若い者は御国のために兵隊に行つてご奉仕する、それが家の誇りと贅えられた時代でしたから、母は母なりに覚悟は決めてくれていると信じていました。

昭和十九年九月二十日、待ちに待った入営の日です。母をはじめ家族、親族、近所の方々の見送りを受け家を出発しました。気丈な母は涙一つ見せず見送ってくれました。むしろ私自身が、皆さんの顔を見るのが最後ではなかるうかと思えますと、知らず知らず涙が頬を濡らしました。父の死

後女手一つで育てた長男を御国に送り、果して無事で帰ることが出来るかどうかかわからない戦局の中で、口でこそ云わないがどんな辛い思いであったろうかと察し、京都市伏見の中部第四十部隊（野砲兵部隊）第五中隊に入隊しました。尋常小学校高等科を卒業して、青年学校で四年間教育訓練を受けておりましたのでいくらか気は楽でした。

入隊してから一カ月間、野砲兵第五十三連隊補充隊は中支派遣嵐部隊の野砲兵第二百二十二連隊要員として仮編成されましたので、その準備としての予防接種や、巻脚絆の巻き方や三角布の使い方等の訓練が主で、軍事教練等はほとんど行われませんでした。中国への移動準備に手が回らなかったと思われま。

私達の入隊後五日遅れて、新しい人達が入隊しました。この兵隊達はフィリピン派遣要員とのことで、部隊内はごった返しの状態でした。野砲兵ですから馬も何十頭もおりましたが、私達は一度も馬の世話をすることはありませんでした。ただ

大陸は日本では考えられないような大平原でただ驚くばかりでした。

昭和十二年七月七日、勃発した支那事変は、中国全土に拡大して既に七年余、広大な中国各地で戦火を交えています。この鉄道沿線各所には日本軍の兵隊の血が流れているに違いないと、思わず手を合わせました。走りも走った十月十二日、河南省洛陽と云う街に到着しました。初めて見る中国の街、広々とした大平原、四カ月前まで中国軍と戦火を交えた河南作戦の結果、日本軍が占領した街でもあると聞きました。私達は洛陽の西宮と云う所で、教育担任部隊第十師団司令部配属砲兵隊佐賀砲兵隊（隊長・佐賀勝郎少佐）で、十月十二日より十二月十四日まで、本来の軍事訓練の教育が行われました。私は通信班でしたから連日、有線の延伸や撤収に走り回るなど訓練は厳しいものでした。

この地は大陸性気候帯で、昼間は汗が出るような暖かさですが、夜になると冷え込んで来ます。

突然雨が降り出して乾し藁を急いで片付けしたことはありました。この頃は諸物資が不足気味で、軍隊の物資も不足して、腰の短剣もいったん払下げていたものを回収して再使用したり、飯盒も金物でなく竹製で箱型の弁当入れでした。これでこれからも戦争ができるのかなあと不安に思いました。

九月二十九日、いよいよ中国に向けて京都駅を普通旅客列車に乗車し出発しました。山陽本線を西に下り博多駅に夜到着、朝博多港を「昌慶丸」に乗船し、釜山港には夜到着、直ちに軍用列車で朝鮮半島を北上、縦断して十月二日、鮮満国境安東を通過、南満州を通り十月三日、満支国境山海関を通過しました。六百人の大移動にもかかわらず、その素早い行動、食事の準備、後始末の早さ、さすがに訓練された軍隊だと驚きました。

同日付けで、私達は第十一野戦補充隊に編入されたとのことで、詳細は分かりませんでした。が、軍用列車は北支那から中支那へと走り続けました。

兵舎と云っても中国軍が使用していた兵舎であったために床にアンペラが敷いてあるだけで、その上に軍服を着てごろ寝する状態でした。十一月、十二月になると暖房がないので、外套を着て四、五人寄り添って寝なければ寒くて眠れない。水が不足して顔も洗えない。入浴も二カ月の間に一回湯に浸かっただけで、飲む水さえも不足がちで困りました。

食事も糧秣不足で、三度三度の食事がすいとん汁とマントウ二個、牛肉が二片位で、昼間の激しい訓練に対して余りにも粗末な食事のため、多くの者の体重が四キロ位減少し苦労しました。愚痴を云いながらも、第一線で戦っている人達は野宿し、食、べ物を食べる暇もなく、生命がけで闘っている姿を思い、まだまだ私達は雨風ものげるし、糧は少ないが食べられるだけ幸だと自分を慰め頑張りました。

軍事訓練を受けつついつ中国軍が襲来するか油断大敵、交代で警備勤務に従事していました。こ

れによって二カ月間の教育を受け私達も心身共に兵隊らしくなりました。十二月十四日、私達は南京に駐屯している原隊に復帰するため洛陽を出発しました。

十二月十九日、安徽省蚌埠駅に停車しました。

時間も正午頃、その日は素晴らしい良い天気の日でした。狭い貨車の中より外に出て食事しようと貨車を出た途端「飛行機だ！」との声、空を見上げるとB 29三機が飛んで来ました。それを見送って「ほーっ」としているところに、背後から機銃掃射と「ビューツ」という唸り音と共に爆弾が大音響で炸裂し、大騒動となりました。

「ぐわーっ」と音を立てて落ちる爆弾、音を聞いて建物に逃げ込む者、貨車の下に逃げ込む者、「うわーっ」と悲鳴を上げて倒れる者、一瞬にして正に阿鼻叫喚の生地獄と化しました。

蚌埠にはワイナと云う川が流れており、これが日本軍の進入を食い止めているので橋を爆破するために飛来したもののようです。そして貨車から

出て来た日本兵を発見し、攻撃を加えて来た様子でした。空襲が事前に分からなかったのか、後で聞きますと、空襲警報が発令されているのを輸送指揮官に通報していなかったために起きた大惨事のようでした。

爆弾によって手足を千切られて飛び散っている、傷口が裂かれたようになって倒れて即死、重軽傷者の数は三百人を越えるのではないかと思われましました。大惨状でした。負傷者を近くの病院に運ぶのに担架だ、戸板だと、泣き叫び大騒動となりました。

B 29は間もなく立ち去り、兵站病院も上を下への大騒ぎとなりました。私も煉瓦造りの小屋に逃げ込み、伏せていますと近くで物凄い音がして爆弾が炸裂し、「やられた」と思った瞬間、母の顔が浮かびました。腰の所がチカッと焼火箸が飛んで来たように熱かったので急いで手を当てたら血が流れている。起き上がろうとしますが起きられません。倒れた私は担架に乗って病気に運ばれる時

に周りを見ますと、その辺に死体が五、六十人位は見えました。私の病名は右上腎部爆創と診断されました。

蚌埠には蚌埠山と云う山が在って、そこには高射砲の陣地もあり飛行機目掛けて撃ちますが、爆弾は下の方で炸裂し何の効果もありませんでした。私が入院してからも何回かB 29が来襲しましたが、その都度動ける患者は防空壕に避難し、高射砲の音も寝台の上で聞きました。病院でも即死者の処理に困ったとも聞きました。

突然の空襲と夥だしい即死者で、火葬施設は一カ所しかないのいろいろな考え処理されたようでした。兵站病院に担ぎ込まれて入院した兵隊達の中にも、頭部を負傷した兵隊が小さな傷のようでしたが死亡した者もありました。診療主任の軍医が話すには、「今度入院した兵隊のように傷の回復が遅く、その上死亡率の高い兵隊は今までかつてないことだ」と、慨嘆されたのは何を意味するのであつたらうか。

私なりに判断した結論は、入隊わずか三カ月と云う短い軍隊生活で耐える根性がなく病気に負けたのではないだろうか。それと併せて体重が三キロ、四キロと減少するような栄養しかとれず、抵抗力が弱っていたのではないかと思えました。気の毒なことでした。

幸いにして私は、傷も治り、昭和二十年二月十八日に退院して、二月二十日、本隊の駐屯する南京に向かつて出発しました。

二月二十五日南京着、第十一野戦補充隊に復帰しました。南京でも病院は大変なようでした。出発しておりました戦友の話によりますと、南京でも宿舍の設備が粗末の上に食糧不足で食事が悪く、その上シラミの発生が物凄く、加えて十二月の厳冬と重なり「発疹チフス」が蔓延し、感染した兵隊が次々と南京の陸軍病院に入院したとのことでした。

当時、南京には数多くの集団部隊が駐留していて南京病院に入院する患者も多く、便所に立つて

帰って見ると寝ていた場所は無くなっていると云う状態でした。その中に、嵐部隊の兵隊が「発疹チフス」で大量に入院したので、嵐部隊は南京嵐が来たかと嫌がられたとも話してくれました。

私は独立混成第九十一旅団砲兵隊第三中隊に編入、転属を命ぜられ、南京を出発して三月二日浙江省寧波に到着、三月二日から四月一日まで陣地の構築作業に汗を流しました。

この寧波は遠い昔、日本から派遣された遣唐使が着いた港で、有名な道元禪師が修業された大きな寺もありました。舟山列島も近くに在り、米軍の上陸を阻止する塹壕掘りが主な作業でした。この地でも再び「発疹チフス」が発生し、多くの感染した兵隊が野戦病院に入院しました。「シラミ」にかまれて痒いので掻くと、そこが紅くぶつぶつとなり、やがて高い熱が発生して体がふらふらとなり、仕事が出来なくなる病状を呈し、多くの兵隊が野戦病院に担ぎ込まれました。

この地は南京と違い亜熱帯地区で、気候が暖か
し通信教育を受けました。
六月十七日、旅団通信隊が移駐のために寧波を出発して慈溪に到着、この地でさらに通信手教育が実施されました。寧波と慈溪の往復でした。七月三十一日、通信手教育が終了となり原隊に復帰しました。

原隊に復帰と同時にまた陣地構築作業に従事させられました。この地は蒋介石総統の出身地とも聞きました。日本本土がどのようになっているのか、中国全土の戦況がどのようになっているのか、分からないまま、毎日穴掘りとセメントを流して壁作り作業ばかりでした。

八月十五日になって、将校は旅団司令部に集合との命令があったようでした。何か天皇陛下の放送があったやに聞きましたが、詳細は分かりませんでした。

夕方になって中隊全員に集合の命令があり、山の陣地構築作業を止めて、夜の八時頃全員集合し、中隊長から明日から戦闘行為を中止するとの命令

く衣服の「シラミ」の駆除が出来たこと、兵舎の防疫作業が順調に進んだこともあって、次第に終息しました。

塹壕掘りもつるはしとスコップを使つての作業で、思うように作業も進みませんでした。四月二日、移駐のため寧波を出発し近くの慈溪に移動しました。四月一日付で一等兵に進級し、兵隊らしい兵隊になったと嬉しく思いました。それでも新兵が来ないので万年初年兵、ここでも陣地構築作業で塹壕掘りでした。

この頃は兵器もほとんどなく、砲兵隊も大正年間製された一二センチの榴弾砲一基で、射撃の方法も違う粗末な大砲でしたが幸い砲火を交えることがなかったから助かりました。食糧事情は洛陽や南京とは違いまあまあで三度三度食べることが出来ました。

四月十五日付で旅団内無線通信手集合教育専修員を命ぜられ、四月十七日、集団教育のため旅団通信隊に分遣となり、慈溪を出発して寧波に到着

が云い渡されました。戦闘行為の中止との意味が分かりませんでした。十六日は午前中軍事教練、午後は午睡で皆喜びました。後で終戦の詔勅が下されたと聞きましたので、さほど感激も動揺もありませんでしたが、戦争は負けたのかと残念に思うと共に、これで日本に帰れるとの喜びもありました。

昨日まで汗にまみれた作業も取り止めになり、何か気の抜けたような毎日が続きました。戦争は終わった。いつ日本に帰れるのかうろろしている中、九月五日慈溪を出発、九月十一日紹興に到着、紹興はお酒の産地であちこちに酒を入れる瓶が積んであるのを見えました。中国の銘酒紹興酒の製造地であると後で聞かされました。

九月二十六日、紹興を出発し肅山に駐留しました。浙江省内で杭州の近くの街です。九月三十日、嘉興に移動しましたが、移動移動で食事が次第に粗末になり、減量された粥食を食べさせられることもありました。気力の低下と共に食糧の粗末さ

が原因して、嘉興に在りました陸軍病院には連日入院患者が続出し、一日数人の死亡者も有るとも噂されました。後日その事実が証明されました。

九月三十日から十一月八日の間、杭州にて軍馬の管理をさせられました。軍馬も兵器ですから中国軍に渡すまでは大切に育て、一頭でも死なせると大変で、みんな腫れものに触るようには大切にしました。引渡しがつむと今度は、十一月二十五日から一月七日まで箕橋飛行場（杭州飛行場）の土木作業をさせられました。寒さと食糧不足のため辛い毎日の土木作業が続けられ、多くの軍人が陸軍病院に入院しました。

二月下旬、私も死亡者の遺体埋葬作業を命ぜられ、大きな穴を掘り、無造作に数体を穴に掘り込み土をかぶせましたが、余りにも簡単な土葬作業でした。戦争で死亡するのではなく、終戦になってから病死される方々の憐れさ、噂さの通りでした。遺骨の採取も肘から下の部分でしたが、死者が多いので小指の先だけになってしまい、まことに気

れで最後だと思つた途端「母の顔が」浮かんだと、爆撃で負傷して入院生活二カ月、南京と寧波での「シラミ」騒動、嘉興での死亡者の遺体の処理、箕橋飛行場での土木作業等、走馬灯のように頭の中を駆け巡りました。

入隊以来一年六カ月、中国軍と戦火を交えることはなかったが、兵隊の苦労も戦争の悲劇も身にしみて感じた。二度と戦争があつてはならないと胸に刻み、四月三日博多港に入港しました。

上陸して日本の土を踏みしめた時の嬉しさ、やつと日本に帰つたぞ、みんなの顔は晴々としておりました。目の前の博多の悲惨な姿は憐れでした。改めて現役満期除隊の命令はありませんでしたが、それぞれ別れの挨拶を交わし、それぞれの列車に乗車し故郷へ帰って行きました。

私は大阪駅で乗り換えて鯖江駅で下車し、自宅へ走るようにして帰りました。「ただいまー」自宅では夢にも忘れなかった母や弟や妹達が涙を流して喜び迎えてくれました。「やつと帰つたぞ」家族

の毒でした。箕橋飛行場では広々とした飛行場の中、寒風の吹く寒さに震えつつ、中国機の待避壕作りに狩り立てられ、敗戦の悲哀をしみじみと感じさせられました「支那兵、支那兵」と侮つた呼び方をしていた日本兵が、その支那兵からこき使われ、多くの兵隊が病死してゆく様を見るにつけ、戦争の悲惨さを身にしみて感じました。

昭和二十一年三月二十六日、日本へ帰るため嘉興を出発し、上海に到着したのは三月三十一日、四月一日、海防艦五〇号に約六百人が乗船し、上海を出港しました。すし詰めにされた軍艦の中で皆日本に帰れる喜びの声を聞きながら、家で待っているであろう母や兄妹達の顔が浮かんで来ます。京都に入隊、京都から博多へ、博多港から釜山へ、朝鮮半島を縦断して満州へ、南満州から北支へ、そして中支の洛陽での厳しい訓練と量の少ない「すいとん汁」に腹を空し、軍服のまま寒さを防ぐため戦友と抱き合いごろ寝したこと、蛙埠でのB29の空襲を受けた悲惨な状況、爆撃を受けこ

への挨拶もそこそこに、仏壇に向かつて手を合わせました。十三歳の時に別れた父に「お父さん無事に帰りました喜んで下さい。もう二度と戦争があつてはなりません」と報告致しました。

終戦後の物資不足の中で、御国のために尊い命を捧げられた人達の分まで、祖国の再建に努力せねばと私なりに精一杯努力し頑張りました。戦友会も作り、集まる度ごとに苦労話しや、不幸にして死亡された戦友達に思いを馳せ、二度と戦争の悲劇を繰り返してはならないと誓い合いました。

母の顔 観音様の 顔に見え

思わず流す 感謝の涙

過ぎし日を 思い起こして 頬濡らす

寒さしのぎで 寄り寝した日々

国の為 命捧げし 戦友の

笑顔偲びて 涙溢るる